アートプロデュース論

教養
1年生　2年生
2単位　後期
金曜5限
実務経験あり
講義

寺田 航

〔履修条件〕
必須となる知識・技能はないが、現状の外側に勇気を持って飛び出す意思を持つ学生を全力で後押しするための講義である。講義では、グループディスカッションやフィードバック、補講期間に1on1のコーチング（一人50分程度）など、アクティブラーニングを中心に進めるため、間違いを恐れず自分の考えを発言し、他者との対話に主体的に参加する意思を持つ学生の受講を求める。

また、本講義ではGallup社のCliftonStrengths（ストレングスファインダー）アセスメントを授業内で実施し、自己理解の材料として用いる。なお、本講義内で実施するCliftonStrengths（ストレングスファインダー）アセスメントについては、受講学生に追加の費用負担は生じない。
補講期間に行う1on1のストレングスコーチング（一人50分程度）は必須。
以上の点を理解したうえで履修登録すること。
PC・タブレットは必須ではないが、学習効率の観点から持参しての参加が望ましい。
〔授業の概要〕
キャスティング権を持つ人に選ばれなければ稼ぐことはできないし、
稼げなければ副業で生計を立てるしかなくなり、本業が副業化した「自称プロ」になる。

優れた表現力も重要だが、現場ではチケットが売れる人が優先的にキャスティングされる。
なぜなら、選んで買ってくださるお客様がいなければ赤字となり、興行は継続できないからだ。

誰かに選ばれなければ、大きな役割も大きなお金も得られない。
これはフリーランスでも、会社員でも、将来の進路を問わず避けて通れない現実である。

「選ばれるための自分の勝ちパターンを知る」ことに焦点を当て、
本講義ではセルフプロデュースとプロダクトプロデュースの両輪で構成する。

前者では人材から人財への転換を、後者では予算と企画を収益に変える構造を扱う。
また講義終盤では、会社員とフリーランスのメリット・デメリットや、卒業後に必要となる手続きや準備についても取り上げる。
〔授業の到達目標〕
本講義を通じて、学生は自分の思考・感情・行動の特徴を整理し、これまで無意識に選んでいた考え方や行動の癖に気づき、今後の選択や行動を意識的に選ぶことができる。
自分の強みと弱みを区別して捉え、弱みの修正に過度な時間を費やすのではなく、自分の強みをどの分野に集中して伸ばしていくのかを考えることができる。
また、自分の強みの中から、他者にとって価値があり希少性の高い点に気づき、それを将来どのような役割や仕事につなげていくのかを構想することができる。
さらに、自分の強みを将来の専門性として成立させるためには、短期的な成果ではなく、長期的な訓練や継続的な取り組みが不可欠であることを理解することができる。
次に、作品や企画を一度きりで終わらせず、継続して成立させるためのプロダクトプロデュースの考え方を理解し、予算や収益の視点を踏まえた現実的な計画を構想することができる。
加えて、会社員とフリーランスの働き方の違いを理解し、それぞれのメリット・デメリットや必要な手続きや準備を把握したうえで、卒業後の進路を現実的に考えることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　授業ガイダンス（オリエンテーション）
講義の目的、進め方、評価方法の説明。
「選ばれる／選ばれない」という現実と、本講義で扱う全体像を共有する。
※授業内容については、進行状況等により多少の前後が出ることを承知しておくこと。
第 2 回　セルフプロデュース①
強みと弱みの考え方を整理し、「選ばれるための勝ちパターン」という本講義の軸を理解する。あわせて、次回実施するCliftonStrengths（ストレングスファインダー）アセスメントの目的や位置づけを説明する。
※授業内容については、進行状況等により多少の前後が出ることを承知しておくこと。
第 3 回　セルフプロデュース②
CliftonStrengths（ストレングスファインダー）アセスメントを授業内で実施する。
※本回はアセスメント実施のみとし、結果の読み取りや活用は次回以降で扱う。
※授業内容については、進行状況等により多少の前後が出ることを承知しておくこと。
第 4 回　セルフプロデュース③
資質の理解と読み取り
アセスメント結果をもとに、自分の強みの傾向を理解する。
※授業内容については、進行状況等により多少の前後が出ることを承知しておくこと。
第 5 回　セルフプロデュース④
思考・感情・行動とリフレーミング
出来事に対する思考・感情・行動の関係を整理

し、捉え方を変えることで行動の選択肢を広げる考え方を学ぶ。
※授業内容については、進行状況等により多少の前後が出ることを承知しておくこと。

第 6 回　プロダクトプロデュース①
予算書から考える企画（概念）
予算書を起点に作品や企画を考える視点を学ぶ。
予算書と企画書は表裏であることを理解する。
収入と費用の関係を整理し、「黒字」とは何か、「成立する企画」とは何かを理解する。
※授業内容については、進行状況等により多少の前後が出ることを承知しておくこと。

第 7 回　プロダクトプロデュース②
予算書・企画書作成　実習①（個人ワーク）
PC・タブレットを使用し、実際に簡易的な予算書を作成する。
収入項目と費用項目を書き出し、収支のバランスを確認する。
予算案を反映した企画書を同時並行で作成していく。
※授業内容については、進行状況等により多少の前後が出ることを承知しておくこと。

第 8 回　プロダクトプロデュース③
予算書・企画書作成　実習②（個人ワーク）
作成した予算書をもとに、黒字化や継続性の観点からブラッシュアップを行う。
予算案を反映した企画書を同時並行でブラッシュアップしていく。
※授業内容については、進行状況等により多少の前後が出ることを承知しておくこと。

第 9 回　プロダクトプロデュース④
予算書・企画書フィードバック①（1on1）
作成した予算書と企画書についてのフィードバックを、1on1で一人10分程度（受講者総数次第）で順次行う。作成した企画書および予算書をプリントアウトして持参することを求める。詳細については、講義内で事前に説明する。
※授業内容については、進行状況等により多少の前後が出ることを承知しておくこと。

第 10 回　プロダクトプロデュース⑤
予算書・企画書フィードバック②（1on1）
作成した予算書と企画書についてのフィードバックを、1on1で一人10分程度（受講者総数次第）で順次行う。作成した企画書および予算書をプリントアウトして持参することを求める。詳細については、講義内で事前に説明する。
※授業内容については、進行状況等により多少の前後が出ることを承知しておくこと。

第 11 回　プロダクトプロデュース⑥
予算書・企画書フィードバック③（1on1）
作成した予算書と企画書についてのフィードバックを、1on1で一人10分程度（受講者総数次第）で順次行う。作成した企画書および予算書をプリントアウトして持参することを求める。詳細については、講義内で事前に説明する。
※授業内容については、進行状況等により多少の前後が出ることを承知しておくこと。

第 12 回　プロダクトプロデュース⑦
予算書・企画書フィードバック④（1on1）
作成した予算書と企画書についてのフィードバックを、1on1で一人10分程度（受講者総数次第）で順次行う。作成した企画書および予算書をプリントアウトして持参することを求める。詳細については、講義内で事前に説明する。
※授業内容については、進行状況等により多少の前後が出ることを承知しておくこと。

第 13 回　プロダクトプロデュース⑧
予算書・企画書フィードバック⑤（1on1）
作成した予算書と企画書についてのフィードバックを、1on1で一人10分程度（受講者総数次第）で順次行う。作成した企画書および予算書をプリントアウトして持参することを求める。詳細については、講義内で事前に説明する。
※授業内容については、進行状況等により多少の前後が出ることを承知しておくこと。

第 14 回　会社員とフリーランスの違い
会社員とフリーランスの違い、メリットデメリットを整理して、収入の考え方、リスク、卒業後の必要な手続きや準備を整理する。
※授業内容については、進行状況等により多少の前後が出ることを承知しておくこと。

第 15 回　まとめ・到達度確認（小テスト）
講義全体の振り返りと理解度確認を行う。

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
本講義では、セルフプロデュースにおける自己理解を深めるため、学生一人ひとりの理解や成長を丁寧に支援する個別コーチングを中心としたフィードバック方法を採用する。特に、CliftonStrengths（ストレングスファインダー）を用いたストレングスコーチングについては、個人情報を扱う内容であることから、補講期間内に1on1形式で実施し、学生一人あたり50分程度の時間を確保して行う。

また、プロダクトプロデュースにおける企画書および予算書についても、1on1形式での個別フィードバックを行う。作成された内容に対し、収入と費用のバランス、黒字化や継続性の観点から具体的なコメントを行い、学生が自ら改善点に気づき、次の修正につなげられるよう支援する。
これらの個別フィードバックは、受講者数に応じて複数回に分けて実施する。

あわせて、授業内では全体的な傾向や共通するポイントについて総評を行い、個別フィードバックと全体共有を組み合わせることで、理解の定着を図る。

〔授業時間外の学習〕
本講義では、授業時間外の学習として、本講義全体を通じて60時間以上の主体的な学修を行うことを求める。
提出を伴う課題は設定せず、日常生活や実習、稽古、制作活動の中で、授業内容を継続的に意識しながら考え、行動

することを時間外学習とする。

セルフプロデュースの回では、CliftonStrengths（ストレングスファインダー）で示された自分の上位資質が、日常生活や実習、稽古の中でどのように使われているかに気づき、強みが発揮されている場面を認識することが望ましい。
あわせて、下位資質がどのような場面で行動の妨げになっているかにも目を向け、その影響にどう対処するかを考えることを求める。
これらを通じて、思考・感情・行動のつながりを日常的に振り返り、よりよい行動選択につなげていくことを重視する。

また、プロダクトプロデュースの回では、身の回りの作品や企画、制作活動に触れた際に、収入と費用のバランスや黒字化、継続性の視点から考えることを時間外学習として位置づける。
これらの学修は、特別な作業や提出を必要とせず、日常の中で継続的に考え続けることを想定している。
〔教科書・参考書等〕
本講義において、購入を必須とする教科書・参考書は指定しない。
講義では、教員が作成した資料をプロジェクター等で投影しながら進行する。
関連する書籍や資料については、講義内で必要に応じて紹介するが、購入は任意とする。
また、講義で使用する紙資料については、必要に応じて教員が配布する。
〔成績評価〕
成績評価は、以下の配分により総合的に判断する。
授業への取り組み：40%、課題への取り組み：40%、学習到達度の確認小テスト：20%

S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、授業への取り組み、小課題への取り組み、小テストのいずれにおいても特に優れていた者）

A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、授業への取り組み、小課題への取り組み、小テストがいずれも良好であった者）

B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解および、授業への取り組み、小課題への取り組み、小テストが概ね良好であった者）

C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解および、授業への取り組み、小課題への取り組み、小テストが不十分であった者）

D　総合点が50点未満の者（授業内容を理解せず、授業への取り組み、小課題への取り組み、小テスト、出席状況等に問題があった者）
〔科目ナンバリング〕
CAE2040B

〔学位授与方針との関係〕
②、③
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
ー

青少年教育論

教養
1年生　2年生
2単位　前期
月曜4限
実務経験あり
講義

大谷 賢治郎

〔履修条件〕
子どもならびに若者のための舞台芸術に深い関心があること。
児童青少年教育における演劇の可能性への探求意欲があること。
〔授業の概要〕
世界の児童青少年の演劇事情を学ぶ。
舞台芸術が児童青少年の発達にどのような影響を及ぼすのか学習・研究する。
児童青少年のための舞台芸術作品の創作に挑戦する。
〔授業の到達目標〕
• 世界の児童青少年演劇を学習し、その現状について説明できる。
• 発達心理学の分野等で研究されている、舞台芸術が児童青少年に及ぼす影響を学習し、自らリサーチできる。
• これらの学習を経て、児童青少年のための演劇作品を創作することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　授業の導入
授業内容の説明と目標設定
※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。
第 2 回　Theatre for Young Audiences（TYA）とは何か
第 3 回　乳児のための演劇
第 4 回　幼児のための演劇
第 5 回　青少年のための演劇
第 6 回　世界のTYA
第 7 回　児童青少年のための演劇ワークショップの可能性
第 8 回　児童青少年のための演劇ワークショップを考案・発表
第 9 回　発達心理学等における舞台芸術の重要性について①
基礎
第 10 回　発達心理学等における舞台芸術の重要性について②
世界の研究成果
第 11 回　発達心理学等における舞台芸術の重要性について
リサーチの発表①前半（2回に分けて行う）
第 12 回　発達心理学等における舞台芸術の重要性について
リサーチの発表②後半
第 13 回　作品創造①
前半（2回に分けて行う）
第 14 回　作品創造②
後半
第 15 回　総評
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
提出された課題に対し講評を行い、場合によってはフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
課題発表のためのリサーチを行う。作品の執筆に取り組む。これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
教科書：必要に応じて授業時に配布。
参考書：必要に応じて授業時に配布。
〔成績評価〕
授業への取組み・創造過程への関わり方80%、発表の内容20%の総合的評価。
S　総合点が90点以上の者（授業への取組み、創造過程への関わり方、発表の内容が大変高く評価できる）
A　総合点が80点以上の者（授業への取組み、創造過程への関わり方、発表の内容が高く評価できる）
B　総合点が60点以上の者（授業への取組み、創造過程への関わり方、発表の内容が評価できる）
C　総合点が50点以上の者（授業への取組み、創造過程への関り方が不十分だが、各課題の発表まで達している）
D　総合点が50点未満の者（授業への取組み、創造過程への関わり方、各課題の発表が評価できない）
〔科目ナンバリング〕
LIA1040B
〔学位授与方針との関係〕
②、④
〔他専攻〕
—
〔キャップ対象外〕
—

芸術空間論

教養
1年生　2年生
2単位　後期
金曜2限
実務経験あり
講義

鈴木 健介

〔履修条件〕
芸術空間（特に舞台芸術）の歴史に興味があること。
〔授業の概要〕
芸術空間の歴史を舞台美術家の視点で解説する。ギリシア悲劇、聖史劇、ルネサンス演劇など歴史的なものから2.5次元、VRなど現代そして未来の芸術空間へとつなげる。
前半では西洋と日本の空間の歴史を説明していく。
後半では各テーマに沿いながら、過去から未来の芸術空間の考察を行う。
最終的に個人が理想の芸術空間を定義できる所までを目指す。
〔授業の到達目標〕
・芸術空間（主に舞台芸術）の歴史の流れが理解できる。
・それぞれの芸術空間のカタチの意味を説明できる。
・歴史を踏まえ自分の理想の芸術空間を考え出す。
〔授業計画〕
第 1 回　イントロダクション
　　授業全体の流れを説明する
第 2 回　芸術空間の流れを掴む①
　　劇場のカタチを考える
第 3 回　芸術空間の流れを掴む②
　　劇場の大きさを考える
第 4 回　芸術空間の流れを掴む③
　　芸術空間の方角から考える
第 5 回　芸術空間の流れを掴む④
　　芸術空間の比率を考える
第 6 回　芸術空間の流れを掴む⑤
　　20世紀の芸術空間を考える
第 7 回　新劇の空間
　　新劇の空間から考える
第 8 回　シェイクスピアの空間
　　シェイクスピアの空間から考える
第 9 回　オペラの空間
　　オペラの空間から考える
第 10 回　ミュージカルの空間
　　ミュージカルの空間から考える
第 11 回　2.5次元の空間
　　2.5次元の空間から考える
第 12 回　テクノロジーと舞台空間
　　テクノロジーと舞台空間から考える
第 13 回　サイトスペシフィックシアター
　　サイトスペシフィックシアターの空間から考える
第 14 回　まとめ
　　第1回目～13回目までの総まとめ
第 15 回　フィードバック
　　個人発表。それぞれの理想の空間を1人ずつ発表する。
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
レポート・課題発表時にフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
中学程度の日本史・世界史をおさらいしておくこと。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
授業時に毎回プリントを配布。
〔成績評価〕
出席と授業への取り組み50%、レポート50%の配分で総合的に評価する。
S　総合点が90点以上の者
A　総合点が80点以上の者
B　総合点が60点以上の者
C　総合点が50点以上の者
D　総合点が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
LIA2012B
〔学位授与方針との関係〕
①、③
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
ー

音楽基礎演習ーバロック・ダンス

芸術科 ＞ 音楽専攻
1年生
1単位　前期
水曜 3限 水曜 4限
実務経験あり
演習（技術）
必修

浜中 康子

〔履修条件〕
音 1 必修。
〔授業の概要〕
17世紀初めの頃から18世紀半ばにかけてフランス宮廷を中心に栄え、ヨーロッパ中に広まっていったダンスをバロック・ダンスと称する。
メヌエットやガヴォット等がその代表的なものであり、日頃演奏や鑑賞を通して関わっているこれらのバロック舞曲を、実際のダンス・ステップを通して体験する。バロック・ダンスのステップや踊り方は、現存する舞踏譜やダンス教本によって300年以上経た今、再現することができる。これらの読み方についても触れ、音楽とダンスの歴史的及び運動的関連性を明らかにする。
ダンスの実習と共に、器楽で舞曲を演奏し、実際にダンスの伴奏を試みたい。
〔授業の到達目標〕
様々な舞曲の中でブレ、メヌエット、カヴォットを発表できるように仕上げることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　バロックダンスについての概説／テクニックの基礎（ポジション他）
※順序や内容は、履修者の能力や進度に合わせて変更する可能性がある。
第 2 回　歴史的背景／テクニックの基礎
第 3 回　ブレの基本的ステップ（音楽と動きのアクセントの関係）
第 4 回　ブレとメヌエットの基本ステップ①
舞踏譜の読み方
第 5 回　ブレとメヌエットの基本ステップ②
舞踏譜の読み方
第 6 回　ブレ①
舞踏譜に記述された振付を踊る
第 7 回　ブレ②
舞踏譜に記述された振付を踊る
第 8 回　発表／ブレのダンスと共に舞踏上の音楽を演奏する
第 9 回　メヌエット①
基本ステップの練習～舞踏の振付を踊る
第 10 回　メヌエット②
基本ステップの練習～舞踏の振付を踊る
第 11 回　メヌエット③
宮廷舞踏のマナーを踏まえて踊る（お辞儀／エスコートの方法）
第 12 回　メヌエットのまとめ①
ガヴォットのステップと練習
第 13 回　メヌエットのまとめ②
ガヴォットのステップを舞踏譜の振付で踊る
第 14 回　メヌエット、ガヴォットの仕上げ／サラバンドやジグについて
第 15 回　メヌエット、ガヴォットの発表／サラバンドやジグについて
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
実技発表の後に、振り返りとして総評を行う。
〔授業時間外の学習〕
• 授業中は知的な理解に留まることも身体表現としてスムーズに行えるように、ステップ名と動きを結びつけながらリピート練習すること。
• 下記教科書「舞曲は踊る...」に記載されているQRコードを通して視聴できる動画を模範にして復習すること。
• 様々な作曲家・時代の舞曲を数多く演奏・鑑賞すること。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
書籍 ： 浜中康子「舞曲は踊る—バッハを弾くためのバロック・ダンス入門」（音楽之友社）
DVD ： 浜中康子監修「フランス宮廷の華『バロック・ダンスへの招待』Ⅰ・Ⅱ」（音楽之友社）
服装 ： 膝の曲げ伸ばしが行いやすいパンツまたはスカート（タイトスカート不可）、ダンスシューズ使用
〔成績評価〕
成績評価については、授業への取り組み50%、実技発表30%、レポート20%を総合的に評価する
S 総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
A 総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確だった者）
B 総合点が60点以上の者（授業内容の理解・課題への取り組みが良好だった者）
C 総合点が50点以上の者（授業内容の理解・課題への取り組みが不十分だった者）
D 総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、学期末試験未提出者、授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS1200M
〔学位授与方針との関係〕
④、⑤
〔他専攻〕
—
〔キャップ対象外〕
—

管楽アンサンブルＡＩｂ/ＢＩ

芸術科 ＞ 音楽専攻
１年生　２年生
1単位　前期
火曜 5限
実務経験あり
演習（技術）
必修
管楽器（Tp・Tb・Tub・Sx専修以外）必修

辻 美佐子

〔履修条件〕
管楽器専修（Tp・Tb・Tub・Sx専修以外）必修。
〔授業の概要〕
木管五重奏を中心に学習していく。各々パート譜をよく読み、５種類の楽器の音色を聞き合い、それぞれの楽器の特徴や奏法を学び合奏の基礎を身につけていく。自身が演奏しない曲目についても各自楽譜を用意して楽曲の理解を深め合奏の基礎や心構えを身につけていく。
〔授業の到達目標〕
作曲家、曲目の背景を自身で調べ、スコアも読みこんで勉強し、メンバーが楽器を通してディスカッションして音楽を作っていく事ができるようにする。また、他の楽器の特徴や奏法を学ぶことができる。
〔授業計画〕
第 1 回　授業内容説明と曲目の選択（前期は古典を中心とする）
※学生の状況により、曲目を考え、学生の希望も取り入れていく。
第 2 回　演奏実習①
第 3 回　演奏実習②
第 4 回　演奏実習③
第 5 回　演奏実習④
第 6 回　演奏実習⑤
第 7 回　演奏実習⑥
第 8 回　演奏実習⑦
第 9 回　演奏実習⑧
第 10 回　演奏実習⑨
第 11 回　演奏実習⑩
第 12 回　演奏実習⑪
第 13 回　演奏実習⑫
第 14 回　演奏実習⑬
第 15 回　前期の曲の通し演奏
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
随時、その場で行う。
〔授業時間外の学習〕
事前に各々がパートの譜読み、練習をしておくこと。可能であれば、分奏をしておくことが望ましい。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
特になし。

〔成績評価〕
授業への取り組み姿勢、授業中の演奏を重視。
実習に対する姿勢50％、実技試験50％にて総合的に評価する。
Ｓ　総合点が90点以上の者
Ａ　総合点が80点以上の者
Ｂ　総合点が60点以上の者
Ｃ　総合点が50点以上の者
Ｄ　総合点が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
MUS1243M/MUS3243M
〔学位授与方針との関係〕
③、④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
ー

管楽アンサンブルＡⅡｂ/ＢⅡ

芸術科＞音楽専攻
１年生　２年生
1単位　後期
火曜5限
実務経験あり
演習（技術）
必修
管楽器（Tp・Tb・Tub・Sx専修以外）必修

辻 美佐子

〔履修条件〕
管楽器専修（Tp・Tb・Tub・Sx専修以外）必修。
１年生はFl専修以外の学生を対象とする。（永井先生に確認をお願いいたします）
前期のＩの単位を修得していること。

〔授業の概要〕
後期は、近現代の木管五重奏を中心に学習していく。各々パート譜をよく読み、５種類の楽器の役割、音色、特徴、奏法を聞き合い、合奏の基礎を学ぶ。自身が演奏しない曲目についても各自楽譜を用意し、共に楽曲の理解を深め合奏の基礎や心構えを学ぶ。

〔授業の到達目標〕
作曲家、曲目の背景を自身で調べ、スコアも読んで勉強し、メンバー全員でディスカッションし、コミュニケーションをとれるようし、音楽を作っていく事を目標とする。また、他の楽器の特徴や奏法を学ぶことができる。

〔授業計画〕
第 1 回　後期曲目説明と選択（近代作曲家の曲も取り入奏法れる）
※学生の状況により、曲目を考え、学生の希望も取り入れていく。
第 2 回　演奏実習①
第 3 回　演奏実習②
第 4 回　演奏実習③
第 5 回　演奏実習④
第 6 回　演奏実習⑤
第 7 回　演奏実習⑥
第 8 回　演奏実習⑦
第 9 回　演奏実習⑧
第 10 回　演奏実習⑨
第 11 回　演奏実習⑩
第 12 回　演奏実習⑪
第 13 回　演奏実習⑫
第 14 回　演奏実習⑬
第 15 回　一組ずつ曲の通しをして試験の代わりとする

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
随時、その場で行う。

〔授業時間外の学習〕
事前に各々がスコアを読みパート譜を練習をしておくこと。
また、可能であれば分奏しておくことが望ましい。
これらの学修に30時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕
特になし。

〔成績評価〕
授業への取り組み姿勢、授業中の演奏を重視。
実習に対する姿勢50％、実技試験50％にて総合的に評価する。
S　総合点が90点以上の者
A　総合点が80点以上の者
B　総合点が60点以上の者
C　総合点が50点以上の者
D　総合点が50点未満の者

〔科目ナンバリング〕
MUS2243M/MUS4243M

〔学位授与方針との関係〕
③、④、⑤

〔他専攻〕
―

〔キャップ対象外〕
―

コード論Ａ

芸術科 ＞ 音楽専攻
２年生
2単位　前期
木曜4限
実務経験あり
講義

小林 真人

〔履修条件〕
コードの仕組みや活用に関心のある学生。
〔授業の概要〕
コードとは何かを知り、それぞれのコードを覚える。
メロディに対して、シンプルなコード付けをできるようにする。
ハーモニーについて考え、理解を深めることで、各々が演奏する際のアイデアを増やし、音楽表現を豊かにするための一助にする。
コードを元に柔軟に演奏する方法を体験する。
コードの説明、実践はピアノを使用して進め、読み方はドイツ音名ではなく英語読みとする。
〔授業の到達目標〕
• ３和音と４和音のコードを覚える。
• セカンダリードミナントセブンを覚える。
• メロディに対して簡単なコード付けができる。
• コードの機能と連結を理解して、それを元にしたシンプルなコードの発展のさせ方を知る。それらをピアノ等で演奏、表現できる。
〔授業計画〕
第 1 回　導入
　　コードとは
第 2 回　コード論　入門編①
　　３和音
第 3 回　コード論　入門編②
　　４和音
第 4 回　コード論　基礎編①
　　３和音のダイアトニックコード
第 5 回　コード論　基礎編②
　　４和音のダイアトニックコードと機能
第 6 回　コード論　基礎編③
　　同じ機能内での代理
第 7 回　コード付けの実践①
　　単純なコード付け
第 8 回　コード付けの実践②
　　ボイシング
第 9 回　コード論　基礎編④
　　ドミナントモーションとⅡm7-Ⅴ7
第 10 回　コード論　基礎編⑤
　　セカンダリードミナントセブン
第 11 回　コード論　基礎編⑥
　　セカンダリードミナントセブンのⅡm7-Ⅴ7
第 12 回　コード付けの実践③
　　リハモナイズとリズムパターンの組み合わせ
第 13 回　コード付けの実践④
　　循環コードと逆循環コード
第 14 回　コード付けの実践⑤
　　様々なコード進行と発展
第 15 回　学習到達度の確認と総括
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
レポート、課題発表時にフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
復習をしっかりして授業に臨むこと。
ピアノ等の和音が出せる楽器を使い、コードのサウンド感を「感覚的」にも捉えられるようにする。
これらの学修に60時間を要する。
〔教科書・参考書等〕
授業時に、その都度プリントを渡す。
〔成績評価〕
授業態度（出席含む）50%、課題発表への取り組む姿勢・レポート等での総合評価50%
S　総合点90点以上の者
A　総合点80点以上の者
B　総合点60点以上の者
C　総合点50点以上の者
D　総合点50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
MUS3012M
〔学位授与方針との関係〕
①、②
〔他専攻〕
◎
※芸術科２年生以上履修可。
〔キャップ対象外〕
—

音楽マネジメント

芸術科 > 音楽専攻
2年生
2単位　前期
月曜2限
実務経験あり
講義

楠瀬 寿賀子

〔履修条件〕
音楽や音楽家の社会的な役割を踏まえて、コンサートやアウトリーチ等の企画を考察する意欲を持つ者。
〔授業の概要〕
芸術音楽の制作のノウハウやスキルを学ぶだけでなく、音楽が自らの生きる力を高めるため、また、それによって生まれる豊かな社会を創出する、という考え方に基づいた音楽マネジメントが重要となる。
この授業では、基本的にはマネジメントの様々なシーンで使える考え方やスキルを学んでいくが、その背景にある音楽の社会的役割の重要性を深く考察し、グループディスカッションやワークショップの形態も交えながら、その考えに即した実施方法を学ぶ。
〔授業の到達目標〕
積極的な興味・関心をもとに豊かな知識やスキルを得て、自らが社会におけるニーズに応えられるようになること。
• 音楽の企画制作の基礎的な能力を身につけることができる。
• 言葉にしにくい音楽・芸術を扱う上で必要な言語化の力を身につけることができる。
• コンサート・アウトリーチ・ワークショップ等の制作手法を理解し、自ら創造することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　オリエンテーション
　　音楽マネジメントとは
第 2 回　日本における音楽マネジメントの形態の変遷
　　コンサートホールなど文化施設の歴史
第 3 回　芸術文化に関わる法律
　　文化芸術基本法、著作権法等
第 4 回　音楽企画の社会性①
　　音楽文化が社会にもたらすもの
第 5 回　音楽企画の社会性②
　　社会性を踏まえた企画の手法を学ぶ
第 6 回　音楽企画のビジネス的側面
　　クラシック音楽業界の現状等
第 7 回　企画内容の多様性
　　音楽を中心に様々な要素（芸術的なジャンルに限らず）を活かす考え方
第 8 回　アウトリーチ・ワークショップ
　　実例から学ぶ
第 9 回　コンサート
　　企画立案の事例等
第 10 回　広報と宣伝について
　　広報・宣伝それぞれの活用方法や広報物の作り方
第 11 回　企画の作り方①
　　グループディスカッション（「企画の作り方」以下4回については履修人数によって内容が多少変動します）
第 12 回　企画の作り方②
　　ワークショップ
第 13 回　企画の作り方③
　　具体的に企画を提案する
第 14 回　企画の作り方④
　　企画発表
第 15 回　総括・振り返り
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
課題提出や企画発表後に講評を行い、必要に応じてその後の授業の中で振り返りを行う。
〔授業時間外の学習〕
様々なコンセプトや構成のコンサートにできるだけ足を運び、運営者の立場での観察に努めてほしい。
マスコミやネット等で話題になる音楽や音楽事業、文化会館の動向等に関するニュースに注意を払い、些細なことでもよいので知識や考察の引き出しを増やすことに努めてほしい。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
教科書は使用せず、授業時にプリントを配付。
参考書等も授業内で適宜紹介する。
〔成績評価〕
筆記試験は行わないが、小論文課題を提出してもらう。評価は小論文50点、日常のレポートや発言等50点として採点する。
S　総合点90点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点80点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確だった者）
B　総合点60点以上の者（授業内容の理解・課題への取り組みが良好だった者）
C　総合点50点以上の者（授業内容の理解・課題への取り組みが不十分だった者）
D　総合点50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、レポート未提出者、授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS3000M
〔学位授与方針との関係〕
③、④
〔他専攻〕
—
〔キャップ対象外〕
—

身体トレーニング

芸術科 ＞ 演劇専攻
1年生
1単位　前期
月曜3限 月曜4限 火曜3限 火曜4限
実務経験あり
実技
必修

山本 光二郎

〔履修条件〕
必修。
カラダを動かすことをいとわない者。
〔授業の概要〕
カラダで表現することに気付き、可能性を確かめる授業である。テクニックの習得もさることながら、受講者個人のカラダに対する許容範囲を広げることを目的とする。
• カラダの柔軟性、カラダの持っているリズムを確認する。
• ダンスカンパニーコンドルズの持つ不思議な世界を紹介する。さらに舞台人として自身の見せ方、見られ方を学ぶ。
• 声や、カラダから出せる音（楽器を含む）などを自身のパフォーマンスと融合することを学ぶ。
〔授業の到達目標〕
カラダを動かすことによって気付く自身の可能性を発見、認識、利用、表現することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　授業の導入、紹介
＜カラダほぐし＞
第 2 回　ストレッチする・カラダで遊ぶ・踊るを遊ぶ
＜基本＞①
第 3 回　ストレッチする・カラダで遊ぶ・踊るを遊ぶ
＜基本＞②
第 4 回　ストレッチする・カラダで遊ぶ・踊るを遊ぶ
＜基本＞③
第 5 回　ストレッチする・カラダで遊ぶ・踊るを遊ぶ
＜応用＞④
第 6 回　ストレッチする・カラダで遊ぶ・踊るを遊ぶ
＜応用＞⑤
第 7 回　動きのフレーズを体験する
振付けを覚えるトレーニング、音楽と共に動きのフレーズを学習する。雑誌、絵本等メディアを使って踊ることを学ぶ
＜基本＞①
第 8 回　動きのフレーズを体験する
振付けを覚えるトレーニング、音楽と共に動きのフレーズを学習する。雑誌、絵本等メディアを使って踊ることを学ぶ
＜基本＞②
第 9 回　動きのフレーズを体験する
振付けを覚えるトレーニング、音楽と共に動きのフレーズを学習する。雑誌、絵本等メディアを使って踊ることを学ぶ
＜応用＞③
第 10 回　動きのフレーズを体験する
振付けを覚えるトレーニング、音楽と共に動きのフレーズを学習する。雑誌、絵本等メディアを使って踊ることを学ぶ
＜応用＞④
第 11 回　演出を含めた小作品をつくる
コンドルズのダンスを踊ってみる・演出を含めた小作品をつくる
＜稽古＞①
第 12 回　演出を含めた小作品をつくる
コンドルズのダンスを踊ってみる・演出を含めた小作品をつくる
＜稽古＞②
第 13 回　演出を含めた小作品をつくる
コンドルズのダンスを踊ってみる・演出を含めた小作品をつくる
＜稽古＞③
第 14 回　演出を含めた小作品をつくる
＜仕上げ＞④
第 15 回　演出を含めた小作品をつくる
＜発表＞⑤
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業ごとに、個々もしくはグループへの動き、演技、演出に対するフィードバックをする。
〔授業時間外の学習〕
授業に参加するには健康であることが大前提であるので、日常的に怪我や病気に注意し、健やかな状態を維持すること。これらの学修に15時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
動きやすい、床に転がってもよい服装。
裸足もしくは靴下。
〔成績評価〕
授業への取り組み重視90%、レポート提出10%を100点に換算する。
S　90点以上の者
A　80点以上の者
B　60点以上の者
C　50点以上の者
D　50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
THE1330T
〔学位授与方針との関係〕
②、④
〔他専攻〕
—
〔キャップ対象外〕
—

演劇特別演習A①②

芸術科 ＞ 演劇専攻
1年生
1単位　後期
月曜3限 月曜5限
実務経験あり
演習（演技）

鴻上 尚史

〔履修条件〕
運動しやすい格好であること。積極的に参加すること。
〔授業の概要〕
俳優の基本である「正しい発声」について徹底的に伝えます。正しい発声を知らずに、演技したり舞台に立つことは俳優としては、重大な損失です。続いて演技の基本である「スタニスラフスキー・システム」を伝えます。演技とは何かを、系統的に理論的に教えます。共に俳優にとっては必修のことです。「正しい身体とは何か？」についても伝えます。プロポーションでも筋肉でもなく、俳優にとって必要な身体とは何か、ということです。(聴講も認めます。演劇をするために必修の項目ですから)
〔授業の到達目標〕
舞台に立つだけではなく、日常でもかれない、表現力豊かな声を獲得できる。また、演技の根本が分かり、演技に対しての恐怖感や自意識、苦手意識を克服できるようになる。
〔授業計画〕
第 1 回　正しい発声とは何か？①
腹式呼吸、胸式、肩式呼吸の違いと、腹式呼吸の特性。
第 2 回　正しい発声とは何か？②
共鳴の5つの身体の場所について。
第 3 回　正しい発声とは何か？③
お腹、つまり丹田で支えるということのメリット。
第 4 回　正しい発声とは何か？④
声のベクトルを意識する。ベクトルとは何か？方向と幅について。
第 5 回　正しい発声とは何か？⑤
それぞれの個人の声の確認。
第 6 回　正しい発声とは何か？⑥
個人の声の確認の続きと声全般の鍛え方、ケアの仕方。発声のまとめ。
第 7 回　正しい身体とは何か？①
正しい身体を外側の視点で検証する。
第 8 回　正しい身体とは何か？②
正しい身体を内側の視点で検証する。アレクサンダーテクニック、フェルデンクライス、野口体操など。
第 9 回　正しい身体とは何か？③
自由な身体とは何か？表現する身体を考える。
第 10 回　スタニスラフスキー・システムについて①
「与えられた状況」を理解する。自意識を取り除くために。
第 11 回　スタニスラフスキー・システムについて②
「魔法のもし マジック・イフ」の視点から演技を考える。
第 12 回　スタニスラフスキー・システムについて③
目的と障害を明確にする。
第 13 回　スタニスラフスキー・システムについて④
目的と障害を明確にした後、それを現す行動を見つけ出す。
短いスキットを演じてみる。
第 14 回　スタニスラフスキー・システムについて⑤
演技を状況ではなく行動から構成する。スキットの続き。
第 15 回　上手な演技とは何か？
上手な演技とは何かを明確に定義する。
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
毎時間、授業の進度に合わせて、適時、学生にフィードバックを行う。スキット発表後は、各学生に講評を行う。毎時間、冒頭に、質問の時間を取り、学生の疑問を受けつけ、それに対して、誠実に対応する。
〔授業時間外の学習〕
授業内で、何をすればよいか適時伝える。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
参考書としては、「あなたの魅力を演出するちょっとしたヒント」（講談社文庫）、「演劇入門」（集英社新書）、「演技と演出のレッスン」「発声と身体のレッスン」（白水社）である。が、あくまで参考書であるので、無理に買うことはない。授業でちゃんと行う。
〔成績評価〕
授業への取り組みおよび授業での参加態度100％で評価する。
S　総合評価90点以上の者
A　総合評価80点以上の者
B　総合評価60点以上の者
C　総合評価50点以上の者
D　総合評価50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
THE2232T
〔学位授与方針との関係〕
②、⑤
〔他専攻〕
—
〔キャップ対象外〕
—

演出論

芸術科 > 演劇専攻
1年生　2年生
2単位　後期
月曜4限
実務経験あり
講義

鴻上 尚史

〔履修条件〕
特になし。
〔授業の概要〕
「演出とは何か？」この根本的な課題を、クラスメイトが書いた戯曲を元に、演じ、希望者は演出して明確にしていく。
〔授業の到達目標〕
演出の目的、意図、伝え方などを身につけることができる。演出と演技の関係を明確に考えられるようになる。
〔授業計画〕
第 1 回　演出とは何か？ 総論
演出をどう考えるか？どこまで指示するのが演出なのか？どこまで指示しないのが演出なのか。学生と共に考えてみる。
第 2 回　戯曲を書く。
5分程度の短い戯曲(3人の登場人物)を各人が書いてみる。書くことで、物語の中で何が重要で何が重要でないかを発見する。
第 3 回　戯曲の修正
うまく戯曲が書けない時は、「簡単に書ける」方法を伝えて、作品に仕上げる。夢を見て、主人公は自分、そこに相手役、やがて、それをじゃまする3人目という発想。
第 4 回　自分の書いた戯曲をリーディングする①
クラスメイトを配役し、まずは読んでみる。演出家として、どんなふうに読んで欲しいかを指示する。
第 5 回　自分の書いた戯曲をリーディングする②
一人一人、自分の書いた戯曲を読む。どんな風に読んでほしいか、どの言葉を強調して欲しいかを伝える。
第 6 回　自分の書いた戯曲をリーディングする③
引き続き、全員が発表するまで、続ける。
第 7 回　自分の書いた戯曲をリーディングする④
引き続き、全員が発表するまで続ける。
第 8 回　自分の書いた戯曲をリーディングする⑤
引き続き、全員が発表するまで続ける。ここまでには、終了する予定。
第 9 回　他人の作品を演出する①
全員の発表を見た後、自分の演出したい作品を決める。そして、出演者3人を他の学生からキャスティングする。この時、自分の書いた作品は除外する。
第 10 回　他人の作品を演出する②
演出の希望者の数によるが、順番に発表していく。3人の出演者の短い芝居だが、自分でキャスティングして、衣装や小道具、音楽など、決めてもよい。
第 11 回　他人の作品を演出する③
一コマで、最大、二組が限界と思われる。言ってみれば、動くリーディングの形で上演する。
第 12 回　他人の作品を演出する④
毎回、演出した感想、演出された感想をシェアする。講師の視点より、よりよい演出方法を提案する。
第 13 回　他人の作品を演出する⑤
演出志望者は、全員、演出できように時間を取る。作品を感想を他の生徒とシェアし、演出とは何かを考える。
第 14 回　他人の作品を演出する⑥
希望者は一人残らず、演出する。演出した感想、演出された感想、見ている感想、そして、もっといい演出はないかとディスカッションする。
第 15 回　まとめ
演出とは何か。最終的に、それぞれの考えをシェアする。
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
発表とリーディング後に随時、振り返りをする。
〔授業時間外の学習〕
戯曲を書く。納得できない場合は、何度も書き直す。演出を希望する者はは、どんな演出プランがいいか、衣装、音楽、小道具などを考え、準備をしておくこと。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
参考文献としては、「演劇入門」(鴻上尚史 集英社新書)「演技と演出のレッスン」(白水社)がある。買う必要はない。授業中に適時、伝える。
〔成績評価〕
受講態度60%、課題への積極性20%、課題の理解度20%にて総合的に評価する。
S：90点以上の者
A：80点以上の者
B：60点以上の者
C：50点以上の者
D：50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
THE2020T
〔学位授与方針との関係〕
①、③
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
○

狂言Ⅰ①②

芸術科 ＞ 演劇専攻
1年生
1単位　後期
木曜1限 木曜2限
実務経験あり
実技
必修
日本音楽専修必修

善竹 大二郎

〔履修条件〕
特になし。
音楽専攻日本音楽専修は必修。
〔授業の概要〕
• 丹田を意識した腹式呼吸を、狂言の謡から体得する。
• 隙のない身体表現を、狂言の小舞を舞うことで体得する。
• 狂言「附子」または「呼声」の実習で、狂言の演出や感情表現を学ぶ。
〔授業の到達目標〕
• 狂言の発声（日本古来の声の出し方）を身につけ、隙のない身体表現と狂言の感情表現を知ることができる。
• 浴衣・袴の着付けを体得できる。
〔授業計画〕
第 1 回　オリエンテーション
浴衣・袴の着付と「盃」の謡①
※授業内容に関しては、その進行具合により、多少変更する場合がある。
第 2 回　「盃」の謡②
声楽と謡の違い
第 3 回　「盃」の謡③・「盃」の舞①
摺り足について
第 4 回　「盃」の謡④・「盃」の舞②・「泰山府君」の謡①・狂言の台本読み①
第 5 回　「盃」の謡⑤・「盃」の舞③・「泰山府君」の謡②・狂言の台本読み②
第 6 回　「盃」の舞④・「泰山府君」の謡③・「泰山府君」の舞①・狂言の台本 読み③
第 7 回　「盃」の舞⑤・「泰山府君」の謡④・「泰山府君」の舞②・狂言の台本読み④
第 8 回　「泰山府君」の謡⑤・「泰山府君」の舞③・「土車」の謡①・狂言の立ち稽古①
第 9 回　「泰山府君」の舞④・「土車」の謡②・「土車」の舞①・狂言の立ち稽古②
第 10 回　「土車」の謡③・「土車」の舞②・狂言の立ち稽古③
第 11 回　「土車」の謡④・「土車」の舞③・狂言の立ち稽古④
第 12 回　「土車」の謡⑤・「土車」の舞④・狂言の立ち稽古⑤
第 13 回　「土車」の舞⑤・狂言の立ち稽古⑥
第 14 回　狂言の立ち稽古⑦
役決め
第 15 回　謡と舞の復習・狂言の立ち稽古⑧
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
リアクションペーパー・小テストにて、フィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
授業内容を踏まえ、自主練習を行うこと。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
「狂言ハンドブック」（三省堂）
〔成績評価〕
平常点（授業への取組み・受講態度）50%、実技点50%を総合的に判断する。
S 総合点が90点以上の者
A 総合点が80点以上の者
B 総合点が60点以上の者
C 総合点が50点以上の者
D 総合点が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
THE2331T
〔学位授与方針との関係〕
①、⑤
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
—

狂言Ⅱ①②

芸術科＞演劇専攻
２年生
1単位　前期
木曜1限 木曜2限
実務経験あり
実技
必修
日本音楽専修必修

善竹 大二郎

〔履修条件〕
「狂言Ⅰ」の単位を修得していること。
音楽専攻日本音楽専修は必修。
〔授業の概要〕
• 丹田を意識した腹式呼吸を、狂言の謡から体得する。
• 隙のない身体表現を、狂言の小舞を舞うことで体得する。
• 狂言「附子」または「呼声」の実習で、狂言の演出や感情表現を学ぶ。
〔授業の到達目標〕
• 狂言の発声（日本古来の声の出し方）を身につけ、隙のない身体表現と狂言の感情表現を知ることができる。
• 浴衣・袴の着付けを体得できる。
〔授業計画〕
第 1 回　オリエンテーション
狂言の身体表現、感情表現、狂言面について
第 2 回　小舞の復習、「雪山」の謡①・狂言の台本読み①
第 3 回　「雪山」の謡②・「雪山」の舞①・狂言の台本読み②
第 4 回　「雪山」の謡③・「雪山」の舞②・狂言の台本読み③
第 5 回　「雪山」の謡④・「雪山」の舞③・狂言の台本読み④
第 6 回　「雪山」の謡⑤・「雪山」の舞④・狂言の台本読み⑤
第 7 回　「雪山」の舞⑤・「十七八」の謡①・狂言の立ち稽古①
第 8 回　「十七八」の謡②・「十七八」の舞①・狂言の立ち稽古②
第 9 回　「十七八」の謡③・「十七八」の舞②・狂言の立ち稽古③
第 10 回　「十七八」の謡④・「十七八」の舞③・狂言の立ち稽古④
第 11 回　「十七八」の謡⑤・「十七八」の舞④・狂言の立ち稽古⑤
第 12 回　今までの謡の復習・「十七八」の舞⑤・狂言の立ち稽古⑥（役決め）
第 13 回　実技公開試験の課題の稽古（小舞と狂言）
第 14 回　実技公開試験
小舞「盃」「泰山府君」「土車」「雪山」「十七八」
狂言「附子」または「呼声」
第 15 回　特別授業（狂言の舞、狂言の特殊な役の身体表現）

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
リアクションペーパー・小テストにて、フィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
授業内容を踏まえ、自主練習を行うこと。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
「狂言ハンドブック」（三省堂）
〔成績評価〕
平常点（授業への取組み・受講態度）50%、実技点50%を総合的に判断する。
S 総合点が90点以上の者
A 総合点が80点以上の者
B 総合点が60点以上の者
C 総合点が50点以上の者
D 総合点が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
THE3330T
〔学位授与方針との関係〕
①、⑤
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
—

劇作法

芸術科＞演劇専攻
1年生　2年生
1単位　前期
金曜4限
実務経験あり
講義

川村 毅

〔履修条件〕
俳優志望者。演出家志望者。劇作家志望者。
さらに舞台に関わるスタッフすべての志望者。
〔授業の概要〕
すべての舞台関係者にとって戯曲の読解は必須である。劇作家志望者はもとより、俳優、演出家、スタッフは何より戯曲を読み、理解しなければならない。当授業は何本かの戯曲を声に出して読み、戯曲というものをどう読み込み、理解するか、小説等他文芸ジャンルの読み方といかに違うか、そして理解した作品をいかに台詞として成立させ、舞台化していくかを学ぶ。
〔授業の到達目標〕
戯曲の読解力。履修者は戯曲の読み方を理解できる。戯曲の書き方の初歩を習得できる。
〔授業計画〕
第 1 回　戯曲とは何か
戯曲という文芸ジャンルの起源、読み方、書き方の基礎を学ぶ。
第 2 回　長編戯曲を読む1
ニール・サイモンの『おかしな二人』を声に出して読み、構造分析する。
第 3 回　長編戯曲を読む2
『おかしな二人』を読み、構造分析する。
第 4 回　長編戯曲を読む3
『おかしな二人』を読み、構造分析する。
第 5 回　長編戯曲を読む4
『おかしな二人』を読み、構造分析する。
第 6 回　長編戯曲を読む5
『おかしな二人』を読み、構造分析する。
第 7 回　長編戯曲の構造について考える。
五回にわたっての構造分析の総まとめをする。長編戯曲の読み方、書き方の初歩を確認する。『おかしな二人』についてのレポートを提出する。個々が書いたレポートをもとにディスカッションをする。
第 8 回　短編戯曲を読む1
川村毅の戯曲『路上』を声に出して読む。
第 9 回　短編戯曲を読む2
川村毅の戯曲『路上2』を読む。『路上』についてのレポートを提出する。それをもとにディスカッションする。
第 10 回　短編戯曲を読む3
川村毅の戯曲『路上3』を声に出して読む。『路上2』についてのレポートを提出する。それをもとにディスカッションする。
第 11 回　短編戯曲を読む4
川村毅の戯曲『路上4』を声に出して読む。『路上3』についてのレポートを提出する。それをもとにディスカッションする。
第 12 回　短編戯曲を読む5
川村毅の戯曲『路上5』を声に出して読む。『路上4』についてのレポートを提出する。それをもとにディスカッションする。
第 13 回　短編戯曲を読む6
川村毅の戯曲『路上6』を声に出して読む。『路上5』についてのレポートを提出する。それをもとにディスカッションする。
第 14 回　短編戯曲を書く
六回にわたる短編戯曲の授業をもとに短編戯曲を書いてみる。
第 15 回　短編戯曲を講評する
書き上げた短編戯曲について講評する。
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
毎回質問の時間を立ち上げる。授業期間中に書き上げた戯曲について講評する。
〔授業時間外の学習〕
内外問わず様々な劇作家の戯曲をできる限り多く読むこと。川村毅の戯曲以外でも授業で紹介する劇作家の戯曲は目を通すこと。
〔教科書・参考書等〕
授業時に指示もしくはプリントを配付する。
〔成績評価〕
授業への取り組み50%、レポートの提出度50%で評価する。
S　総合点が90点以上の者（ディスカッションに積極的に参加し、戯曲読解への取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点が80点以上の者（ディスカッションに積極的に参加し、戯曲読解への取り組みが的確だった者）
B　総合点が60点以上の者（ディスカッションに参加し、戯曲読解への取り組みが良好だった者）
C　総合点が50点以上の者（ディスカッションに参加せず、戯曲読解への取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50点未満の者（出席日数が足りない等授業の取り組みに欠けた者）
〔科目ナンバリング〕
THE2010T
〔学位授与方針との関係〕
①、③
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
—

舞台照明実習②

芸術科 ＞ 演劇専攻
1年生
1単位　前期集中
実務経験あり
実習（staff）
照明部対象

兼子 慎平

〔履修条件〕
照明部の学生を対象とする。
実習が主になるので、稽古着・稽古履等動きやすい服装で受講すること。
また、（舞台）照明に興味があること。舞台照明作業に一度でも触れていることが望ましい。
〔授業の概要〕
参加者全体で取り組む舞台照明の作業を通して、各々の協調性・自立性、またそのバランスのとり方を体で認識すること。そしてその認識を頭と体で昇華し、それぞれの段階で作業に「実践」してみるところまでを、この実習では求めることとする。
作業の中で上記過程を繰り返すことにより、基本的かつ実践的な舞台照明の基礎を学ぶことを目標とする。照明と演者の関係を考察してみる機会も提供する。
〔授業の到達目標〕
基本的かつ実践的な舞台照明の基礎を身につけることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　照明機材についての基本的知識
第 2 回　照明の仕込み作業を学ぶ①（午前）
第 3 回　照明作業における適切なコミュニケーションについて
第 4 回　照明の仕込み作業を学ぶ②（午後）
第 5 回　特殊機材を扱う/舞台照明（シーン）を作る
第 6 回　質疑応答
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
実習終了時に、振り返りとして総評を行う。
〔授業時間外の学習〕
舞台照明に触れる機会があれば積極的に参加すること。
舞台照明に関わる書籍を読み、用語等知識を増やしておくこと
安全に作業するにはどんな点に留意すればよいか、必要な事を日ごろから考察すること。
同セクション、他の各スタッフや演出家とコミュニケーションをとる上で
「意味が伝わりやすく」かつ「正確な言葉」で伝えられるよう日頃から実践すること。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
参考図書：
藤井直　著「ステージ・舞台照明入門　舞台の基礎からDMX、ムービングまで」（リットーミュージック）
小川昇　著「光のデッサンから舞台照明のつくり方まで」（レクラム社）
石井強司　著「舞台美術・照明・音響効果篇（高校生のための実践演劇講座）」（白水社）
藤井 直他著「ネットワーク時代のステージ照明システム構築」
岩城 保　著「新・舞台照明講座: 光についての理解と考察」（レクラム社）　　他
〔成績評価〕
授業への取り組みと積極性60%、講義内容・作業への理解度40%にて総合的に評価する。
S　講義・作業に積極的に関わり、協調性・自立性の両方が認められ、特にリーダーシップも発揮できる者
A　講義・作業に積極的に関わり、協調性・自立性の両方が認められた者
B　講義・作業に積極的に関わり、協調性・自立性どちらか一方でも認められた者
C　積極性にはやや欠けるが、講義内容を努めて真面目に理解しようと認められた者
D　積極性に欠け、講義内容も理解しようと認められなかった者
〔科目ナンバリング〕
THE1541T
〔学位授与方針との関係〕
②、④
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
○

舞台音響実習①

芸術科 ＞ 演劇専攻
1年生
1単位　前期集中
実務経験あり
実習（staff）
音響部以外対象

佐藤 こうじ

〔履修条件〕
音響部以外の学生を対象とする。
〔授業の概要〕
舞台における俳優が知っておくとよい音響の知識を学ぶ。音響的なことではなく、俳優視点の授業である。授業の最後に、実習を行う。
〔授業の到達目標〕
• 音響の仕事、機器の扱いを理解することにより、スタッフの意図を汲み、よりクオリティの高い作品づくりを目指すことができる。
• 「伝える」ことの難しさを理解できる。
〔授業計画〕
第 1 回　搬入、仕込み、サウンドチェックの説明
機材の持ち方、運び方、置き方、仕込み時間の音響の仕事の説明
第 2 回　ライブハウスPA、舞台音響、ミュージカル音響の違い
音響の仕事の説明
第 3 回　スピーカーの向きの検証（モニターの必要性）
モニターがないとどのように聞こえるのか
第 4 回　カラオケボックスでキーンとなるのは何故か（ハウリングの検証）
舞台でハウリングが起きる原因を説明
第 5 回　有線マイク、ワイヤレスマイク（ハンドマイク、ピンマイク）の取り扱い
正しいマイクの使い方
第 6 回　サンプラーの紹介（刀の音、殴る、蹴る等の音を動きと合わせる音響効果）
俳優の動きに合わせる。
第 7 回　実習の場当たり（チームごとに分かれる）
俳優チーム　音響チームと分かれて班をつくり、場当たり
第 8 回　実習
俳優チーム　音響チームと分かれて班をつくり、実習
第 9 回　撤去
安全な撤去を目指しましょう。
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
発表後、振り返りとして総評を行う。
〔授業時間外の学習〕
実習で使用するプリントを事前配布するので、目を通し理解しておくこと。
〔教科書・参考書等〕
プリントを配布する。
筆記用具、舞台で動けるようなシャツ、ズボン着用のこと。小劇場で作業をするために必要な上履き、運動靴着用のこと。
〔成績評価〕
授業への取組み50%、実習への取り組みと態度50%を100点換算して評価する。
S　総合点が90点以上の者
A　総合点が80点以上の者
B　総合点が60点以上の者
C　総合点が50点以上の者
D　総合点が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
THE1542T
〔学位授与方針との関係〕
②、④
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
○

舞台音響実習②

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
1単位　前期集中
実務経験あり
実習（staff）
音響部対象

宮崎 淳子

〔履修条件〕
音響部の学生を対象とする。
〔授業の概要〕
基本的な音響機材の使用方法、効果を知り、学内イベントや稽古でのセッティング、オペレートに役立てる。
〔授業の到達目標〕
• 音響機材の信号の流れを理解し、基本的な結線がスピーディーに行うことができる。
• 簡単なトラブルシューティングができる。
〔授業計画〕
第 1 回　ケーブルの名称を再確認、統一する。
第 2 回　機材の用途、機能を知る。
第 3 回　仕込図（配線図）を書くことができるようにする。
第 4 回　信号の流れに沿った結線をする。
第 5 回　スピーカー吊り込み作業の補助、高所作業時の注意点を学ぶ。
第 6 回　2人 1 組で10分以内に卓周りの結線をする。
第 7 回　音が正常に出ない時の原因究明の方法
第 8 回　台本への書き込み方、音のIN/OUTの技法を学ぶ。
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業後に、振り返りとして総評を行う。
〔授業時間外の学習〕
適宜、指示する。
〔教科書・参考書等〕
授業時にプリントを配布。
〔成績評価〕
実技試験70％、筆記試験30％で100点に換算。
S　90点以上の者
A　80点以上の者
B　60点以上の者
C　50点以上の者
D　50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
THE1543T
〔学位授与方針との関係〕
②、④
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
○

室内楽研究Ｂ/Ｄａ

専攻科＞音楽専攻
１年生　２年生
2単位　後期
火曜2限
実務経験あり
演習（技術）

阪本 奈津子

〔履修条件〕
特になし。
〔授業の概要〕
学生と室内楽要員によるアンサンブルを通して、基本的な合奏能力の向上、各作曲家のスタイルの理解を深める。
〔授業の到達目標〕
互いに尊重し、楽しみながら音楽作りをしていく中でアンサンブルの基本を習得することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　導入および曲目の検討
※専攻楽器の種類によって、変更あり。
第 2 回　古典派の室内楽作品　モーツァルト①
ピアノと弦楽器　二重奏
第 3 回　モーツァルト②
三重奏以上の編成
第 4 回　モーツァルト③
管楽器を含む室内楽作品
楽器の相違によるフレージングの注意点
第 5 回　ハイドンの室内楽作品①
モーツァルトとの関連性ー弦楽四重奏曲
第 6 回　音程について　純正律と平均律　ハイドン②
ピアノを含む室内楽作品
第 7 回　ベートーヴェン①
ベートーヴェンにおける強弱記号の捉え方
第 8 回　ベートーヴェン②
二重奏から五重奏
第 9 回　シューベルト①
シューベルトの音色の選び方
第 10 回　シューベルト②
ピアノとの室内楽
第 11 回　シューマン①
古典派、ロマン派によるヴィブラートの違い
弦楽器の室内楽作品
第 12 回　シューマン②
ピアノを含む室内楽作品
第 13 回　ドヴォルザーク①
国民楽派
関連する作曲家について
弦楽器の室内楽作品
第 14 回　ドヴォルザーク②
ピアノを含む室内楽作品
第 15 回　まとめと確認

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
演習発表時に個別（グループ）に指導、フィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
課題になった作品を、各自、各グループで事前に練習を行うこと。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
特になし。
〔成績評価〕
成績評価については、受講態度40%、課題に取り組む姿勢40%、演奏成果20%の結果を総合的に判断して行う。
S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確かつ秀でた者）。
A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確だった者）。
B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・課題への取り組みが良好だった者）。
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・課題への取り組みが不十分だった者）。
D　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、演奏能力・授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）。
〔科目ナンバリング〕
MUS2242MA/MUS4242MA
〔学位授与方針との関係〕
④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
ー

室内楽研究Ｂ/Ｄｂ

専攻科＞音楽専攻
１年生　２年生
2単位　後期
金曜2限
実務経験あり
演習（技術）

蓼沼 恵美子

〔履修条件〕
ピアノ専修の学生を対象とするが、ピアノを含む室内楽曲（ただし声楽曲を除く）を体得したい他の器楽専修の学生の履修も可。
〔授業の概要〕
ピアノを含む室内楽作品を取り上げ、アンサンブルにおける奏法や音楽作りを学んでいく。
アンサンブルにおいては、ソロ以上に音に対する意識や音楽の柔軟性が求められる場合がある。共演する楽器の特性を踏まえた上で、作曲家が意図する音楽表現のために必要なそれぞれのパートの役割や演奏技術を実践で学ぶ。
演奏員の協力も得て、マスタークラスの形式で授業を進める。受講曲が決まっていない受講生のために、開講前にいくつかの候補曲をClassroomに提示するので、参考にしてほしい。
〔授業の到達目標〕
アンサンブルにおける奏法を修得し、共に音楽をつくり上げる室内楽の楽しさを実感できることを目標に、曲を仕上げる。
具体的には以下の点を到達目標とする。
• 相手の音をよく聴き、呼吸を合わせることができる。
• 各々の楽器との響きの融合を考えた音作りができる。
• 表現のためのそれぞれの楽器のアプローチの仕方を知ることによって、音楽的視野を広げることができる。
• 楽曲の様式や作曲家の意図を踏まえた、より幅広い表現ができる。
〔授業計画〕
第 1 回　オリエンテーションおよび曲目とメンバーの決定
※授業の進行は履修者の人数によって変更することがある。
※試験期間中に発表演奏会を行う。
第 2 回　アンサンブル実習①
第 3 回　アンサンブル実習②
第 4 回　アンサンブル実習③
第 5 回　アンサンブル実習④
第 6 回　アンサンブル実習⑤
第 7 回　アンサンブル実習⑥
第 8 回　アンサンブル実習⑦
第 9 回　アンサンブル実習⑧
第 10 回　アンサンブル実習⑨
第 11 回　アンサンブル実習⑩
第 12 回　アンサンブル実習⑪
第 13 回　アンサンブル実習⑫
第 14 回　アンサンブル実習⑬
第 15 回　アンサンブル実習⑭
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
演習発表時に指導・フィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
演奏発表する曲については、個人練習及び合わせ等、十分に準備して授業に臨むこと。
事前に音源を聴いたり、スコアを見る等、他のパートにも目を向けておくこと。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
授業で演奏するグループが、演奏曲の楽譜をその都度配布する。
〔成績評価〕
成績評価については、授業への取り組み・意欲70％、発表演奏の成果30％にて総合的に行う。
S 総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、授業への取り組み・意欲、演奏能力が的確かつ秀でた者）
A 総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、授業への取り組み・意欲、演奏能力が的確だった者）
B 総合点が60点以上の者（授業内容の理解、授業への取り組み・意欲、演奏能力が良好だった者）
C 総合点が50点以上の者（授業内容の理解、授業への取り組み・意欲、演奏能力が不十分だった者）
D 総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、授業への取り組み・意欲、演奏能力等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS2242MA/MUS4242MA
〔学位授与方針との関係〕
④、⑤
〔他専攻〕
—
〔キャップ対象外〕
—

室内楽研究Ｂ/Ｄｃ

専攻科＞音楽専攻
１年生　２年生
2単位　後期
月曜3限
実務経験あり
演習（技術）

吉岡 次郎

〔履修条件〕
管楽器専修を中心とするが、他専修の受講も可。
アンサンブル（管楽器＋弦楽器、ピアノ等）に興味と意欲のある学生。
〔授業の概要〕
フルートを中心とする二重奏～複数のアンサンブルを基盤に、レパートリー修得と室内楽での演奏法や基礎を学ぶ。並びに、授業当日指定で初見のアンサンブル実習も催し、そこで様々な対応力を学ぶ。
〔授業の到達目標〕
個々の技術の更なる向上と、室内楽における他者との合わせ方、リードの仕方、協調性等を習得する。
初見練習においてはリズムや調性を瞬時に感じる力や、難しいパッセージに対応する力等を習得する。
〔授業計画〕
第 1 回　受講生の習熟度の確認と初見演奏について
第 2 回　学習曲目の検討および組み合わせと初見演奏実習①
第 3 回　アンサンブル実習、初見実習②
第 4 回　アンサンブル実習、初見実習③
第 5 回　アンサンブル実習、初見実習④
第 6 回　アンサンブル実習、初見実習⑤
第 7 回　アンサンブル実習、初見実習⑥
第 8 回　アンサンブル実習、初見実習⑦
第 9 回　アンサンブル実習、初見実習⑧
第 10 回　アンサンブル実習、初見実習⑨
第 11 回　アンサンブル実習、初見実習⑩
第 12 回　アンサンブル実習、初見実習⑪
第 13 回　アンサンブル実習、初見実習⑫
第 14 回　アンサンブル実習、初見実習⑬
第 15 回　アンサンブル発表
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
各回の初見実習の発表後に総評を行い、必要な場合は個別にフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
個々の練習と合わせを授業前に的確に行って準備しておくこと。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
必要に応じて教員より指示する。
〔成績評価〕
成績評価については、授業への取り組み70％、課題発表（発表演奏会）30％の配分で総合的に評価する。
S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確だった者）
B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・課題への取り組みが良好だった者）
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・課題への取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、レポート未提出者、授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS2242MA/MUS4242MA
〔学位授与方針との関係〕
④、⑤
〔他専攻〕
―
〔キャップ対象外〕
―

室内楽研究Ａ/Ｃｂ

専攻科＞音楽専攻
１年生　２年生
2単位　前期
金曜2限
実務経験あり
演習（技術）

菊池 かなえ

〔履修条件〕
楽譜を見たまま正確に演奏するだけでなく、作品にふさわしい様式感、演奏習慣等に興味を持ち、様々な角度から視野を広げたい者。
〔授業の概要〕
本授業では、バロック時代から古典派の音楽を主な題材とし、実践を通して学んでいく。様式感、演奏習慣とは何か。音楽学的考察や現在の実践現場から見えてくる様々な方面からのアプローチを知り、アンサンブルを試みる。自分の専修以外の楽器や声楽との関わり、表現と演奏方法についても考える。
各回の内容は全てリンクしており、履修生の理解度、興味により授業内容の順序を変えていく可能性がある。演奏の実践を中心に進めるが、講義も取り入れながら総合的に学んでいく。
アンサンブルを組み、授業内でのレッスンを重ね、最後に発表を行う。
〔授業の到達目標〕
これまでの時代の演奏習慣を知り、自分の演奏に活かしていく。どのように演奏したらその作品が生きるかを自分で考えることができる。過去の音楽の影響を受けているその後の作曲家への理解が深まり、あらゆる時代の音楽と関連付けることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　歴史的知識に基づく演奏とは
第 2 回　楽譜について
第 3 回　アンサンブル組み
第 4 回　バロック時代周辺の楽器について
第 5 回　演奏習慣について
第 6 回　通奏低音①
　　数字の理解
第 7 回　通奏低音②
　　基本形
第 8 回　アンサンブル中間発表
第 9 回　装飾法①
　　フランス様式
第 10 回　装飾法②
　　イタリア様式
第 11 回　舞曲、組曲について
第 12 回　当時の文献を読む
第 13 回　音楽修辞学について
第 14 回　アンサンブル仕上げ
第 15 回　発表

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業演奏時に個別、グループにアドバイス、フィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
アンサンブル曲の情報収集を図書館等を利用して、自分なりにやってくること。
個人練習、グループでの練習を十分にしてくること。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
プリントを配布。
授業内で参考書を紹介する。
〔成績評価〕
授業への取り組み50％、理解度25％、演奏の成果25％とし、総合的に評価する。
S　総合点90点以上の者（積極的に取り組み、知識を自分のものにし、演奏に成果が表れる）
A　総合点80点以上の者（積極的に取り組み、理解を深めようとし、演奏に変化が見られる）
B　総合点60点以上の者（積極的に取り組み、演奏に生かそうとする）
C　総合点50点以上の者（程よく取り組み、程よく演奏する）
D　総合点50点未満の者（取り組む姿勢に欠け、演奏の変化が見られない）
〔科目ナンバリング〕
MUS1240MA/MUS3240MA
〔学位授与方針との関係〕
④、⑤
〔他専攻〕
—
〔キャップ対象外〕
—

ギター・アンサンブルC/D

専攻科＞音楽専攻
1年生　2年生
2単位　通年
木曜3限
実務経験あり
演習（技術）
必修
ギター専修必修

佐藤 紀雄

〔履修条件〕
ギター専修者必修。
ギター専修者のみ履修可とする。
〔授業の概要〕
古典から現代までのギターアンサンブル作品、編集作品に加え学生自身の作品、編曲による作品等を取り上げる。独奏楽器であるギターの修得課程でアンサンブルの経験や技術を磨く機会を得ることは特に重要であり、将来様々な楽器とのアンサンブルに役立ててもらいたい。その経験を活かし各自の音楽活動の幅を広げてもらいたい。
〔授業の到達目標〕
年2回の自主的発表会に向けて、課題曲の演奏を完成させる。その練習の課程で様々な時代の様式を同時に学ぶことができる。アンサンブルを行う上で何が必要な技術かを知ることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　カルメン組曲①
必要な技術を確認し、習得へ向けた計画づくり
第 2 回　カルメン組曲②
各パート毎の達成状況を見る
第 3 回　カルメン組曲③
アンサンブルの難所を集中して練習する
第 4 回　カルメン組曲④
各曲がオペラのどのような場面で使われているかを調べる
第 5 回　カルメン組曲⑤
①～④を踏まえて表現方法を追究していく
第 6 回　ロッシーニ「泥棒かささぎ」序曲①
いくつかの独特の奏法の演奏法を確認する
第 7 回　ロッシーニ「泥棒かささぎ」序曲②
各パートずつ互いに聴き合い理解しておく
第 8 回　ロッシーニ「泥棒かささぎ」序曲③
アンサンブルの中で各パートの役割を確かめ合う
第 9 回　ロッシーニ「泥棒かささぎ」序曲④
オペラについて調べ、各エピソードが出てくる場面を理解する
第 10 回　ロッシーニ「泥棒かささぎ」序曲⑤
息の長いフレーズ起伏の激しさを表現する
第 11 回　バンドゥークイッカン①
各パートの難所の練習課題を見つける
第 12 回　バンドゥークイッカン②
各パート同士の役割を理解する
第 13 回　バンドゥークイッカン③
ラテンアメリカ独特のリズムについて調べ、リズムの練習をする
第 14 回　バンドゥークイッカン④
ラテンアメリカのリズムが作品の中でどのように応用されているかを試す
第 15 回　バンドゥークイッカン⑤
11～14を踏まえて表現を実現する
第 16 回　レオ・ブローウェル「雨のあるキューバの風景」①
各パートを練習
第 17 回　レオ・ブローウェル「雨のあるキューバの風景」②
二組みずつで合わせて他を聞く
第 18 回　レオ・ブローウェル「雨のあるキューバの風景」③
現代の作曲様式の影響を理解する
第 19 回　レオ・ブローウェル「雨のあるキューバの風景」④
特殊なアンサンブルを理解する
第 20 回　レオ・ブローウェル「雨のあるキューバの風景」⑤
様々な演奏形態を試す
第 21 回　ラヴェル「ラ・ヴァルス」①
多くあるパートの難所を練習する
第 22 回　ラヴェル「ラ・ヴァルス」②
複雑に絡み合った所を理解する
第 23 回　ラヴェル「ラ・ヴァルス」③
全体を通して流れをつかむ
第 24 回　ラヴェル「ラ・ヴァルス」④
この作品の成立の課程を調べ、このワルツの特性を理解する
第 25 回　ラヴェル「ラ・ヴァルス」⑤
めまぐるしく変化するテンポを表現できるようにする
第 26 回　ヴィヴァルディー四季より「春」①
この曲に必要な技術を準備する
第 27 回　ヴィヴァルディー四季より「春」②
各パート毎に弾いて役割を理解する
第 28 回　ヴィヴァルディー四季より「春」③
テンポの激しい変化を皆で理解し練習する
第 29 回　ヴィヴァルディー四季より「春」④
バロック音楽の特徴を調べ、合わせた表現
第 30 回　ヴィヴァルディー四季より「春」⑤
作品の中での自然の描写を豊かに再現する
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
演奏上、またはモチベーションの上で問題を抱えている学生には、個々に面談し解決する方法を探してゆく。一方でアンサンブルの上での問題を発見した場合は、皆で話し合う。
〔授業時間外の学習〕
あらかじめ課題についての知識を得、また技術的に足りない箇所を準備しておく。
これらの学修に60時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕
課題曲の楽譜と参考資料
〔成績評価〕
成績評価については、授業への取り組み30％、課題への取り組み30％、期末試験40％にて総合的に判断して行う。
S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確だった者）
B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・課題への取り組みが良好だった者）
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・課題への取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、演奏能力・授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS2247MA/MUS4247MA
〔学位授与方針との関係〕
④、⑤
〔他専攻〕
—
〔キャップ対象外〕
—

映像映画研究

専攻科＞演劇専攻
1年生　2年生
2単位　前期集中
実務経験あり
講義

山岡 信貴

〔履修条件〕
長編映画を観たことがあれば、その他の条件は必要ない。
〔授業の概要〕
映画の制作現場で行われていることやその効果の研究をベースにして、映画という表現手法がどのように成立しているかについて、歴史的経緯を含めて講義し、その中での俳優の役割がどうなっているかやそれに映像技術がどう貢献するかについてを並行して学ぶ。また、映画以外にも多様になってゆく映像表現全般についても考察してゆく。
答えが必ずしもひとつではない内容を多数含んでいるため、授業テーマによっては、実践的な内容やディスカッションを導入することもある。
〔授業の到達目標〕
「映画とは何か」を俯瞰しながら、映画制作の実際の流れを理解し、映像における演技の特徴やそれに対する映像技術面を通しての効果を実例を通して把握する。
〔授業計画〕
第 1 回　映画とはどのようにできているのか？
※授業の進行によっては、内容が前後する可能性がある。
第 2 回　映画制作の概要
第 3 回　映画における俳優の役割
第 4 回　映画史における俳優の演技の変遷
第 5 回　映画撮影の現場①
第 6 回　映画撮影の現場②
第 7 回　カメラと俳優①
第 8 回　カメラと俳優②
第 9 回　編集と俳優①
第 10 回　編集と俳優②
第 11 回　音声と俳優
第 12 回　映画における嘘
第 13 回　映画とテレビ
第 14 回　複製芸術
第 15 回　映画とは何か？
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
基本的には授業内で実施する。それが難しい内容の場合は、メール等で対応する。
〔授業時間外の学習〕
必要に応じて都度指示を出すが、基本的な方針としては、授業で理解したことや疑問に思ったことを意識しながら既存の映画を鑑賞し、気付いたことを授業のディスカッション等で提示する。
これらの学修に60時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕
授業では必要なし。
以下は参考になる資料なので、授業とは関係なく読んだ方が良い。
ロバート.H.ヘスマン「リー・ストラスバーグとアクターズ・スタジオの俳優たち」（劇書房）
フランソワ・トリュフォー、アルフレッド・ヒッチコック「定本映画術ヒッチコック・トリュフォー」（晶文社）
ロベール・ブレッソン「シネマトグラフ覚書」（筑摩書房）
〔成績評価〕
授業への取り組み50％、レポート50％の配分で総合的に評価する。
S　総合点90点以上の者（授業内容の理解と授業への取り組みが優れている者）
A　総合点80点以上の者（授業内容の理解と授業への取り組みができている者）
B　総合点60点以上の者（授業内容の理解と授業への取り組みがほぼできている者）
C　総合点50点以上の者（授業内容の理解と授業への取り組みが不十分な者）
D　総合点50点未満の者（授業内容の理解と授業への取り組みに問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
THE1003TA
〔学位授与方針との関係〕
①、③
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
ー

演技研究C（現代劇）(1)　1年次

専攻科 ＞ 演劇専攻
1年生
1単位　前期
月曜3限
実務経験あり
演習（演技）

田中 壮太郎

〔履修条件〕
積極的に取り組むこと。
〔授業の概要〕
スタニスラフスキー・システムをベースに演技を習得してゆく。演技とはリアクションであり、行動、行為である。授業では登場人物の基本行動を洗い出し、それを更に小さな行動へと分解してゆく。その行動の一つ一つが更に小さな「適応」を生み出す。適応というのは相手とのコミュニケーションであり、毎瞬間生まれるものだから再現はできない。観客の前においても、リハーサルした事を再現するのではなく、初めて起こる事のように見える再構築が毎回出来る準備をすることが重要であると理解する。役ではなく「自分」を通してそれらを行う感覚を培う。シーンワークを通してドラマを動かす演技を習得してゆく。
〔授業の到達目標〕
シーンワークを通して、実際の舞台や映像の現場で共通して求められる演技力を獲得できる。
〔授業計画〕
第 1 回　授業概要、進行の説明
※授業内容はその進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。
第 2 回　前期シーンワークの作品発表、作品についての話し合い
第 3 回　本読み①
話し合い
第 4 回　本読み②
話し合い
第 5 回　生徒自身による実習場面の選択および相手役の決定、読み合わせ①
第 6 回　読み合わせ②
第 7 回　立ち稽古①
空間の把握
第 8 回　立ち稽古②
台詞の目的化
第 9 回　立ち稽古③
台詞の目的化
第 10 回　立ち稽古④
台詞を自分の言葉にする
第 11 回　立ち稽古⑤
台詞を自分の言葉にする
第 12 回　立ち稽古⑥
台詞を身体から離す
第 13 回　立ち稽古⑦
台詞を身体から離す
第 14 回　立ち稽古⑧
形にする
第 15 回　授業内発表
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業内のコミュニケーションによる。
〔授業時間外の学習〕
作品理解のためのリサーチ。台詞が身体から離れる感覚を得られるまで入れる作業。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
必要に応じて授業内で配布する。
〔成績評価〕
①授業への取り組み10％②障壁や課題に対する姿勢10％③センス10％④授業期間中の成長および変化20％⑤課題に対する成果50％を総合的に評価する。
S　①～⑤で90％以上を獲得した者
A　①～⑤で80％以上を獲得した者
B　①～⑤で60％以上を獲得した者
C　①～⑤で50％以上を獲得した者
D　①～⑤で50％未満だった者
〔科目ナンバリング〕
THE1232TA
〔学位授与方針との関係〕
②、④
〔他専攻〕
—
〔キャップ対象外〕
—

演技研究Ｃ（現代劇）(2)　１年次

専攻科＞演劇専攻
１年生
1単位　後期
月曜3限
実務経験あり
演習（演技）

田中 壮太郎

〔履修条件〕
積極的に取り組むこと。
〔授業の概要〕
スタニスラフスキー・システムをベースに演技を習得してゆく。演技とはリアクションであり、行動、行為である。授業では登場人物の基本行動を洗い出し、それを更に小さな行動へと分解してゆく。その行動の一つ一つが更に小さな「適応」を生み出す。適応というのは相手とのコミュニケーションであり、毎瞬間生まれるものだから再現はできない。観客の前においても再現ではなく再構築をすることが重要であると理解する。役ではなく「自分」を通してそれらを行う感覚を培う。シーンワークを通してドラマを動かす演技を習得してゆく。
〔授業の到達目標〕
シーンワークを通して、実際の舞台や映像の現場で共通して求められる演技力を獲得できる。
〔授業計画〕
第 1 回　後期シーンワークの作品発表、ウォーミングアップ
※授業内容はその進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。
第 2 回　生徒自身による実習場面の選択および相手役の決定、読み合わせ
第 3 回　読み合わせ①
第 4 回　読み合わせ②
第 5 回　立ち稽古①
空間の把握
第 6 回　立ち稽古②
コミュニケーション
第 7 回　立ち稽古③
行動としての台詞
第 8 回　立ち稽古④
相手役を動かす
第 9 回　立ち稽古⑤
役にとって、より負荷の大きい状況を選択していくということ
第 10 回　立ち稽古⑥
形にしてゆく
ブロッキング
第 11 回　立ち稽古⑦
通し稽古
第 12 回　立ち稽古⑧
通し稽古
第 13 回　立ち稽古⑨
通し稽古
第 14 回　後期発表
第 15 回　まとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業内のコミュニケーションによる。
〔授業時間外の学習〕
作品に対する理解のためのリサーチ。台詞が身体から離れる感覚を得られるまで入れる作業。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
必要に応じて授業内で配布する。
〔成績評価〕
①授業への取り組み10％②障壁や課題に対する姿勢10％③センス10％④授業期間中の成長および変化20％⑤課題に対する成果50％を総合的に評価する。
S　①～⑤で90％以上を獲得した者
A　①～⑤で80％以上を獲得した者
B　①～⑤で60％以上を獲得した者
C　①～⑤で50％以上を獲得した者
D　①～⑤で50％未満だった者
〔科目ナンバリング〕
THE2232TA
〔学位授与方針との関係〕
②、④
〔他専攻〕
—
〔キャップ対象外〕
—

演技研究C（現代劇）(1)　２年次

専攻科＞演劇専攻
２年生
1単位　前期
月曜4限
実務経験あり
演習（演技）

田中 壮太郎

〔履修条件〕
積極的に取り組むこと。
〔授業の概要〕
スタニスラフスキー・システムをベースに演技を習得してゆく。演技とはリアクションであり、行動、行為である。授業では登場人物の基本行動を洗い出し、それを更に小さな行動へと分解してゆく。その行動の一つ一つが更に小さな「適応」を生み出す。適応というのは相手とのコミュニケーションであり、毎瞬間生まれるものだから再現はできない。観客の前においても再現ではなく再構築をすることが重要であると理解する。役ではなく「自分」を通してそれらを行う感覚を培う。シーンワークを通してドラマを動かす演技を習得してゆく。
〔授業の到達目標〕
シーンワークを通して、実際の舞台や映像の現場で共通して求められる演技力を獲得できる。
〔授業計画〕
第 1 回　授業概要、進行の説明
※授業内容はその進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。
第 2 回　前期シーンワークの作品発表、作品についての話し合い
第 3 回　本読み①
話し合い
第 4 回　本読み②
話し合い
第 5 回　生徒自身による実習場面の選択および相手役の決定、読み合わせ①
第 6 回　読み合わせ②
第 7 回　立ち稽古①
空間の把握
第 8 回　立ち稽古②
台詞の目的化
第 9 回　立ち稽古③
台詞の目的化
第 10 回　立ち稽古④
台詞を自分の言葉にする
第 11 回　立ち稽古⑤
台詞を自分の言葉にする
第 12 回　立ち稽古⑥
台詞を身体から離す
第 13 回　立ち稽古⑦
台詞を身体から離す
第 14 回　立ち稽古⑧
形にする
第 15 回　授業内発表
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業内のコミュニケーションによる。
〔授業時間外の学習〕
作品に対する理解のためのリサーチ。台詞が身体から離れる感覚を得られるまで入れる作業。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
必要に応じて授業内で配布する。
〔成績評価〕
①授業への取り組み10％②障壁や課題に対する姿勢10％③センス10％④授業期間中の成長および変化20％⑤課題に対する成果50％を総合的に評価する。
S　①～⑤で90％以上を獲得した者
A　①～⑤で80％以上を獲得した者
B　①～⑤で60％以上を獲得した者
C　①～⑤で50％以上を獲得した者
D　①～⑤で50％未満だった者
〔科目ナンバリング〕
THE3232TA
〔学位授与方針との関係〕
②、④
〔他専攻〕
—
〔キャップ対象外〕
—

演技研究Ｃ（現代劇）(2)　２年次

専攻科＞演劇専攻
２年生
1単位　後期
月曜4限
実務経験あり
演習（演技）

田中 壮太郎

〔履修条件〕
積極的に取り組むこと。
〔授業の概要〕
スタニスラフスキー・システムをベースに演技を習得してゆく。演技とはリアクションであり、行動、行為である。授業では登場人物の基本行動を洗い出し、それを更に小さな行動へと分解してゆく。その行動の一つ一つが更に小さな「適応」を生み出す。適応というのは相手とのコミュニケーションであり、毎瞬間生まれるものだから再現はできない。観客の前においても再現ではなく再構築をすることが重要であると理解する。役ではなく「自分」を通してそれらを行う感覚を培う。シーンワークを通してドラマを動かす演技を習得してゆく。
〔授業の到達目標〕
シーンワークを通して、実際の舞台や映像の現場で共通して求められる演技力を獲得できる。
〔授業計画〕
第 1 回　後期シーンワークの作品発表、ウォーミングアップ
※授業内容はその進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。
第 2 回　生徒自身による実習場面の選択および相手役の決定、読み合わせ
第 3 回　読み合わせ①
第 4 回　読み合わせ②
第 5 回　立ち稽古①
空間の把握
第 6 回　立ち稽古②
コミュニケーション
第 7 回　立ち稽古③
行動としての台詞
第 8 回　立ち稽古④
相手役を動かす
第 9 回　立ち稽古⑤
役にとって、より負荷の大きい状況を選択していくということ
第 10 回　立ち稽古⑥
形にしてゆく
ブロッキング
第 11 回　立ち稽古⑦
通し稽古
第 12 回　立ち稽古⑧
通し稽古
第 13 回　立ち稽古⑨
通し稽古
第 14 回　後期発表
第 15 回　まとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業内のコミュニケーションによる。
〔授業時間外の学習〕
作品に対する理解のためのリサーチ。台詞が身体から離れる感覚を得られるまで入れる作業。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
必要に応じて授業内で配布する。
〔成績評価〕
①授業への取り組み10％②障壁や課題に対する姿勢10％③センス10％④授業期間中の成長および変化20％⑤課題に対する成果50％を総合的に評価する。
S　①～⑤で90％以上を獲得した者
A　①～⑤で80％以上を獲得した者
B　①～⑤で60％以上を獲得した者
C　①～⑤で50％以上を獲得した者
D　①～⑤で50％未満だった者
〔科目ナンバリング〕
THE4232TA
〔学位授与方針との関係〕
②、④
〔他専攻〕
—
〔キャップ対象外〕
—

演劇特別研究(1)①②

専攻科＞演劇専攻
1年生　2年生
1単位　前期
土曜1限 土曜2限
実務経験あり
演習（演技）

眞鍋 卓嗣

〔履修条件〕
授業時間外も課題の稽古に積極的に取り組むこと。
稽古着・運動靴を必ず着用すること。
授業時間内は必ず時計・アクセサリー等を外すこと。
遅刻・欠席の場合は理由書を作成し、必ず直接提出すること。

〔授業の概要〕
演技基礎を他者との交流の視点から学ぶ。様々なトレーニングを施し、それがどのように実演技に結びついているかを、戯曲の一場面を使って検証する。

〔授業の到達目標〕
• 専門俳優・表現者に必要な他者との交流の本質を探求し、向上することができる。
• 他者との交流の重要性を知ることで、集団においての協働性を向上することができる。
• 戯曲の解釈と登場人物の役割を学んだ上で、他者との交流をどのように演技に生かすかを学び、実際に実演することができる。

〔授業計画〕
第 1 回　トレーニング
　　交流①
第 2 回　トレーニング
　　交流②
第 3 回　トレーニング
　　交流③
第 4 回　トレーニング
　　与えられた状況の中の自分①
第 5 回　トレーニング
　　与えられた状況の中の自分②
第 6 回　トレーニング
　　与えられた状況の中の自分③
第 7 回　戯曲読解
第 8 回　役へのアプローチの仕方、読み合わせ
第 9 回　読み合わせ
第 10 回　セリフの覚え方
第 11 回　実演①
第 12 回　実演②
第 13 回　実演③
第 14 回　実演④
第 15 回　前期の総括、ディスカッション

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
発表の後に、振り返りとして総評を行う。

〔授業時間外の学習〕
• 授業内容をノートに書き、疑問点や理解したこと等をまとめること。
• 与えられた宿題をやってくること。
• 実演する場合の道具や衣装等を用意すること。
これらの学修に30時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕
教科書：授業時に配布（戯曲の一場面）

〔成績評価〕
授業の取り組み50%、課題の成果30%、レポートの内容20%にて、総合的に評価する。
S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題の成果が特によく見られ、授業への取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題の成果がよく見られ、授業への取り組みが的確だった者）
B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解や課題の成果が良好であった者、または取り組みが的確だった者）
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解や課題の成果が不十分だった者、または取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、取り組みに問題があった者）

〔科目ナンバリング〕
THE1234TA

〔学位授与方針との関係〕
①、④

〔他専攻〕
—

〔キャップ対象外〕
—

演劇特別研究(2)①②

専攻科＞演劇専攻
1年生　2年生
1単位　後期
火曜1限 火曜2限
実務経験あり
演習（演技）

眞鍋 卓嗣

〔履修条件〕
授業時間外も課題の稽古に積極的に取り組むこと。
稽古着・運動靴を必ず着用すること。
授業時間内は必ず時計・アクセサリー等を外すこと。
遅刻・欠席の場合は理由書を作成し、必ず直接提出すること。
〔授業の概要〕
他者との交流の視点から演技基礎を学ぶ。それがどのように実演技に結びついているかを、戯曲の一場面を使って検証する。前期で学んだことを生かし、より実践的な内容とする。
〔授業の到達目標〕
• 専門俳優・表現者に必要な他者との交流の本質を探求し、向上することができる。
• 他者との交流の重要性を知ることで、集団においての協働性の向上をすることができる。
• 戯曲の解釈と登場人物の役割を学んだ上で、他者との交流をどのように演技に生かすかを学び、実際に実演することができる。
• プロの現場で行われているアプローチの仕方を学び、専門俳優・表現者として向上することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　戯曲読解・読み合せ①
第 2 回　戯曲読解・読み合せ②
第 3 回　戯曲読解・読み合せ③
第 4 回　戯曲読解・読み合せ④
第 5 回　立ち稽古の前準備・セリフ合わせ①
第 6 回　立ち稽古の前準備・セリフ合わせ②
第 7 回　立ち稽古の前準備・セリフ合わせ③
第 8 回　立ち稽古①
第 9 回　立ち稽古②
第 10 回　立ち稽古③
第 11 回　立ち稽古④
第 12 回　立ち稽古⑤
第 13 回　発表①
第 14 回　発表②
第 15 回　後期の総括、ディスカッション
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
発表の後に、振り返りとして総評を行う。
〔授業時間外の学習〕
・授業内容をノートに書き、疑問点や理解したこと等をまとめること。
・与えられた宿題をやってくること。
・実演する場合の道具や衣装等を用意すること。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
教科書：授業時に配布（戯曲の一場面）
〔成績評価〕
授業の取り組み50%、課題の成果30%、レポートの内容20%にて、総合的に評価する。
S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題の成果が特によく見られ、授業への取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題の成果がよく見られ、授業への取り組みが的確だった者）
B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解や課題の成果が良好であった者、または取り組みが的確だった者）
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解や課題の成果が不十分だった者、または取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、取り組みに問題があった者）
〔科目ナンバリング〕
THE2234TA
〔学位授与方針との関係〕
①、④
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
ー

舞踊Ｂ（コンテンポラリー）

専攻科＞演劇専攻
１年生　２年生
1単位　前期
水曜2限
実務経験あり
実技

勝倉 寧子

〔履修条件〕
専攻科１・２年に置かれる選択科目。
経験の有無に関わらずコンテンポラリー・ダンスに興味があり、身体表現の習得に意欲的であること。
〔授業の概要〕
同時代のダンスという意味のコンテンポラリー・ダンスは、バレエにはない動きで表現の幅を大きく広げたモダンダンスよりもさらに新しい、最先端を行くダンスである。スキルフルで洗練され、アクロバティックで重力を利用した美しい脱力が特徴的。舞台芸術の中でも心とからだの密接な関係を深く実感できる、実に魅力的な身体表現である
コンテンポラリー・ダンスの中でも、バレエ・モダン・ジャズ・シアター・舞踏等あらゆるダンスを理解した上に成り立つ技法は、演劇においても質の高い身体表現を可能にするために大いに有効である。
この授業では、まずコンテンポラリー・ダンスのテクニカルトレーニングを積むことでからだを意志通りにコントロールできる能力を養う。応用ではテーマごとの実践を通して確かな技能、実践に役立つ表現力を身につけていく。
更に、昨年度同様音楽学部との共同制作を実施する予定である。
〔授業の到達目標〕
• コンテンポラリー・ダンスの理解を深め、その技術を習得できる。
• プロの俳優として通用するからだをつくることができる。
• 演じる上で、身体を使った感情表現をスムーズに行うことができる。
• プロの演出家、振付家、音楽家の要求に対応し得る基礎技術、応用力を身につけることができる。
• 自作自演、他者への演出を可能にする創作力・演出力を身につけることができる。
• 全プログラムを修了することで、協調性・距離感・空間認知能力・プランニング力を高めることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　ストレッチ＆リリース
・スウィング＆リリーステクニック
・呼吸法
・筋力強化(インナー、アウター、体幹)
※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。
第 2 回　アライメント、重力のコントロール
・姿勢の矯正、正確なポジショニング
・フォール&リバウンド、リカバリー、サスペンション
第 3 回　基礎テクニック1、2の理解度と動きのチェック、動きを伴う重心移動
・動きのリーダー
・フロアーワーク
第 4 回　テクニック応用... ダイナミックな3次元的空間使いの実践
・ステップバリエーション
・フロアー＋ジャンプ&ターン
第 5 回　フレーズを踊る①
舞踊身体表現の実践...まとまった長さのフレーズ(振付)を習得し、身体的に理解する
第 6 回　音楽学部との共同制作①
・音楽学部生との顔合わせ
・昨年度コラボ授業試写、実技試験作品発表
第 7 回　フレーズを踊る②
・感情を伴う表現の実践...音楽やシチュエーションを手がかりに感情を身体表現として扱う
第 8 回　フレーズを踊る③
空間、他者との関わりを意識した表現の実践...音楽、感情、空間認知を踏まえ、距離感や協調性を身体で捉える
第 9 回　小道具を使ったダンス...プロップダンスの実践
映像鑑賞を通して表現例を学び、小道具を踊りのパートナーとして扱う
第 10 回　プロップダンスによるパフォーマンスの実践
小道具を用いた表現をもとに、グループで創作、発表を行う
第 11 回　インプロビゼーション①
・即興力...新しい動きの生み出し方、手掛かりとなる手法
第 12 回　インプロビゼーション②
・デットスペース...他者の作り出す空間を利用したインプロ
第 13 回　インプロビゼーション③
日常的な仕草や行為を出発点とした身体表現の探求から、舞踊表現への発展へと繋げていく
第 14 回　作品創作の手引き
創作プロセスの実践...音楽学部生提供楽曲を用い、ダンススコアの役割や構成を学ぶ
第 15 回　音楽学部との共同制作②
共同制作の実践...楽曲解説を踏まえ、インプロビゼーションを含むコラボレーションを行い、相互に振り返る
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
作品発表の後に全員を集め個々の作品ごとに講評、最後に総評を行う。
〔授業時間外の学習〕
・毎回の授業で学んだテクニックは、次回の授業までに必ず復習しておくこと。
・予習課題には積極的に取り組み、次の授業までに準備しておくこと。
・日頃から、創作（実技試験）の素材となり得る音楽やテ

ーマの情報収集に努めること。
・舞踊動画等を積極的に視聴すること。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
稽古着はシンプルで動きやすいものが望ましい。
基本的にシューズを履かずに行う。素足をカバーするための布製の履物や靴下等は着用可。
〔成績評価〕
授業の取り組み50％、課題に対する評価50％とし、総合的に評価する。
S　総合点が90点以上の者（基本的な諸事項を十分に理解し、それらを的確に用い優れた身体表現を実現することができる）
A　総合点が80点以上の者（基本的な諸事項を十分に理解し、それらを明確に表現し応用できる身体能力を持っている）
B　総合点が60点以上の者（基本的な諸事項をほぼ理解し、それらを表現し応用できる身体能力を持っている）
C　総合点が50点以上の者（基本的な諸事項をある程度理解し、身体表現能力に向上が見られる）
D　総合点が50点未満の者（基本的な諸事項の理解に欠け、身体表現能力に向上が見られない）
〔科目ナンバリング〕
DNC1340TA
〔学位授与方針との関係〕
②、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
ー